

# 福岡県柳川方言における「行く」を表す動詞に見られる 「不完全」な補充法

——itar- を含む形式に着目して——

松 岡 葵

東京外国語大学・日本学術振興会（特別研究員PD）

**【要旨】** 本研究は、福岡県柳川方言における「行く」を表す動詞に補充法が生じていると主張し、各語根の出現環境を明らかにする。多くの九州方言で、「行く」を表す語根として ik- と itar- の形式の二形式が報告されている（柳川方言：{ikan/\*itaran} 「行かない。」, {itte/ita(t)te} 「行って」）。先行研究は、両者を類義語の関係にあると分析するものと、補充法の関係にあると示唆するものに大別される。本稿は記述データを基に、柳川方言においてこれらは類義語ではなく補充法の関係にあると主張する。itar- は、-te を通時的に含む接辞（以下、T 接辞）のうち、-te および完了接辞 -tor、予期完了接辞 -tok のいずれかの接辞が後続する場合に現れ、他の T 接辞、そして T 接辞以外の接辞が後続する場合には現れない。ただし、ik- と itar- の出現は相補分布しておらず、この点で「不完全」な補充法である\*。

**キーワード：**九州方言、フィールド調査、形態論、補充法、類義語

## 1. はじめに

本稿の目的は、福岡県柳川方言（以下、柳川方言）における「行く」を表す動詞に補充法が生じていると主張し、それぞれの語根の出現環境を明らかにすることである。補充法は、英語の go と went の間に見られるような、意味的には規則的な対応をもつ一方で形式的には不規則な対応をもつという関係である (Meščuk 1994: 342)。補充法は、通時的な成立の違いによって大きく二つに分類される。一つは、英語における go と went、日本語標準語における「する」と「できる」のように、元々は異なる語根であったものが同じ語根の異形態としてふるまうようになる強補充法 (strong suppletion; Dressler 1985: 330, Haspelmath and Sims 2010: 25) であり、もう一つは、英語における buy と bought のように、それぞれの形態どうしに音韻

\* 調査に協力してくださった話者の方々、本研究にコメントをくださったの方々、本稿を査読してくださった査読者に感謝の意を表す。本稿は、筆者未公開博士論文の一部と、第168回日本言語学会でおこなった「九州方言における「行く」を表す動詞に見られる不完全な補充法：福岡県柳川市方言を中心に」などの発表を大幅に修正・改稿したものである。本稿に含まれる誤謬は、全て筆者の責任に帰する。本稿は、JSPS 科研費 22KJ2426, 24KJ1005 の助成を受けている。

的な類似点はあるものの通常の音韻規則で説明できない弱補充法 (weak suppletion; Dressler 1985: 331, Haspelmath and Sims 2010: 25) である (2 節で詳述)。

柳川方言においておおよそ「行く」という意味を表す動詞のエリシテーションデータを, (1), (2), (3)<sup>1</sup> に示す。(1), (2), (3) に示すように, 柳川方言において「行く」を表す形式には, ik- およびその弱補充形である it-, i- と (it-, i- について, 4.4 節で詳述), itar-, ita- がある。itar-, ita- は継起接辞が後続する場合には出現可能であるのに対し (1), 非過去接辞, 命令接辞が後続する場合には出現できない (2) (3)。itar-, ita- は, 音韻的, 意味的類似性から標準語の「至る」と同根であると指摘される (愛宕 1983: 35)。

以下では, ik- およびその弱補充形 (it-, i-) を ik- 系列形式, itar- および ita- を itar- 系列形式と呼ぶ。(1) が示すように ik- 系列形式と itar- 系列形式はおおよそ「行く」という意味を表すものの, 異なる形式をもつ。一般に異なる形式は異なる意味機能をもつため, 両者は類似するものの異なる意味機能をもつ類義語である可能性が考えられる。

- (1) *tosyokansan* {*itte/ ite/ itatte/ itate*}  
*tosyokan=san* {*it-te/ i-te/ itar-te/ ita-te*}  
 図書館 =ALL {行く -SEQ/ 行く -SEQ/ 行く -SEQ/ 行く -SEQ}  
 「図書館へ行って,」
- (2) *tosyokansan* {*iku/ \*itaru*}  
*tosyokan=san* {*ik-ru/ itar-ru*}  
 図書館 =ALL {行く -NPST/ 行く -NPST}  
 「図書館へ行く。」
- (3) *tosyokansan* {*ike/ \*itare*}  
*tosyokan=san* {*ik-e/ itar-e*}  
 図書館 =ALL {行く -IMP/ 行く -IMP}  
 「図書館へ行け。」

一方, これらが補充法の関係にあることを示唆する言語事実もある。以下に, 柳川方言の自然談話 (筆者収集, 約 10 時間) における ik- 系列形式と itar- 系列形式の出現数を示す。表 1 のデータは派生接辞が出現しない例に限定している。表 1 が示すように, 継起接辞が後続する場合には itar- 系列形式が多く現れるのに対し, 他の屈折接辞が後続する場合には ik- 系列形式のみが現れている。すなわち, 完全

<sup>1</sup> 本稿では, 各例文を, 一段目に斜体で表層の音素表記を, 二段目に基底の音素表記を, 三段目に形態素分析を, 四段目に標準語訳を示す「標準 4 段方式」(下地 2020) で示す。本稿で用いる略号は, 以下の通りである。ALL: 向格, ADJZ: 屈折形容詞化, COM: 共格, COP: コピュラ, DAT: 与格, ENDO: 内心, EXO: 外心, FMN: 形式名詞, HON: 尊敬, IMP: 命令, NEG: 否定, NOM: 主格, NPST: 非過去, PERM: 許可, PF: 完了, POT: 可能, PST: 過去, PURP: 目的, SEQ: 継起, SFP: 終助詞, SG: 単数, THM: 語幹拡張母音, TOP: 主題

な相補分布ではないものの、形態論的環境に応じて相補分布に近い分布を示しており、これは補充法の特徴に類似する。

表1 ik- 系列形式と itar- 系列形式の出現数

	ik- 系列形式	itar- 系列形式
継起接辞が後続	9	40
他の屈折接辞が後続	209	0

3節で後述するように、広く九州方言において itar- がおおよそ「行く」という意味をもつこと、継起接辞と共起する例が多いことは、先行研究の記述から明らかになっている。これらの先行研究は、ik- と itar- を類義語の関係にあると分析するものと、補充法の関係にあることを示唆するものに大別される。鹿児島諸方言を対象に ik- と itar- の違い、itar- の出現環境を扱った木部（2014）は、ik- と itar- は類義語の関係にあると主張する。さらに、itar- が想定される活用形の多くを欠くことを指摘した上で、活用形の欠落を itar- のもつ意味的な特徴によって説明する。一方で、佐賀県北山方言を対象とした小野（1969: 386–387）、佐賀県南部方言を対象とした木下（1996: 22）、鹿児島県出水方言を対象とした井島（1984: 68）、鹿児島県串木野方言を対象とした黒木（2024）は、ik- 系列形式と itar- 系列形式に意味上の違いはなく、itar- 系列形式は「行く」を表す動詞の活用形の一部である、すなわち補充法の関係にあると解釈可能である記述をおこなっている。

本稿は、柳川方言を対象に、ik- 系列形式と itar- 系列形式に意味の違いがあるか、itar- 系列形式の活用形の欠落を意味的な観点で説明できるかを検討し、ik- 系列形式と itar- 系列形式の間に意味の違いが見出せないこと、itar- 系列形式の活用形の欠落は意味によって説明できないことを示す。これらのことから、ik- 系列形式と itar- 系列形式は補充法の関係にあると主張する。itar- 系列形式は、-te を通時的に含む接辞（以下、T 接辞）の一部が直接後続する場合に出現する。具体的には、-te および完了接辞 -tor、「(あらかじめ) ~しておく」という意味を表す予期完了接辞 -tok のいずれかの接辞が後続する場合に現れ、他の T 接辞、そして T 接辞以外の接辞が後続する場合には現れない。ただし、(1) が示すように ik- 系列形式と itar- を含む形式は完全には相補分布しておらず、この点で「不完全」である。

本稿の構成は、以下の通りである。2節で、補充法という概念の整理をおこなう。3節では、九州方言における「行く」を表す動詞の記述を概観する。九州方言の一部では、ik- 系列形式と itar- 系列形式が報告されており、itar- 系列形式は想定される活用形の多くを欠く。両者の関係を明らかにする上で論点となるのは、① ik- 系列形式と itar- 系列形式に意味的な違いが存在するか、② itar- 系列形式が活用形を欠くのはなぜか、の二点であることを指摘する。4節では、九州方言の中でも柳川方言に着目する。柳川方言の動詞の構造と体系を概観した上で、① ik- 系列形式と itar- 系列形式に意味的な違いが見出せない、② itar- 系列形式が活用形を欠くのは

形態論的な問題であると指摘し、両者が補充法の関係にあると主張する。5節では、まとめと今後の課題を示す。

## 2. 補充法の導入

本節では、本稿が扱う補充法という概念の導入をおこなう。補充法とは、意味的には規則的な対応であるにもかかわらず、形式的には不規則な対応にあるような関係を指す (Meščuk 1994: 342)。1節で述べたように、補充法は、強補充法 (strong suppletion; Dressler 1985: 330, Haspelmath and Sims 2010: 25, あるいは full suppletion; Corbett 2007: 15 や proper suppletion; Börjars and Vincent 2011: 241 とも) と弱補充法 (weak suppletion; Dressler 1985: 331, Haspelmath and Sims 2010: 25, あるいは partial suppletion; Corbett 2007: 15 や phonological suppletion; Börjars and Vincent 2011: 241 とも) に大別される。強補充法は、元々は異なる語根であったものが同じ語根の異形態としてふるまうようになったものであり、弱補充法は、それぞれの形態間に音韻的な類似点はあるものの通常の音韻規則で説明できないものである。

強補充法は、ある語 (語 A) のパラダイム内に、語 A と類義語の関係にある語 B のパラダイムの一部が侵入するという通時的変化の結果として生じる。この変化は断続的なものではなく、徐々に進行する (Rudes 1980: 666, Bybee 1985: 91–92, Börjars and Vincent 2011 など多数)。変化が徐々に進行するため、強補充法が生じる過程では、侵入される語 A の該当する語形と侵入する語 B の該当する語形が相補分布せず、いずれもが語 A の活用形としてふるまうという状況が見られる (図 1)。例えば英語においては、動詞 *wendan* の過去形に由来する *went* が *go* の過去形として侵入した後でも、数世紀にわたり古い過去形である *ēode* も用いられた (Fisiak 1968: 97–98, Lass 1992: 142–143, Welna 2001)。強補充法が生じる過程では、侵入された語の対応する語形の生じる頻度は徐々に低く、侵入した語形の頻度は高くなっていき (Rudes 1980: 666, Bybee 1985: 91–92)、その後、相補分布が生じる。

語形が相補分布していることを「補充法」の必要条件とするか、すなわち図 1 の二段階目のような状況を補充法とみなすかどうかは、研究によって立場が分かれる。例えば、Veselinova (2006: 48) は、二段階目のようにある環境において語根 A を含む形式と語根 B を含む形式の両方が出現する場合、これを交替 (alternation) と呼び、補充法と区別する。一方、Meščuk (1994: 353) は、両語形に意味上の違

	語A	語B		語A			語A			
	語根A	語根B		語根A	語根B		語根A	語根B		
活用形 α	○	○	⇒	活用形 α	○	○	⇒	活用形 α	×	○
活用形 β	○	○		活用形 β	○	×		活用形 β	○	×
活用形 γ	○	○		活用形 γ	○	×		活用形 γ	○	×
…	○	○		…	○	×		…	○	×

図 1 強補充法の発生する過程 (○はその語根が出現可能なことを示す)

いがないのであれば、二段階目のように相補分布していない場合も補充法とみなすべきであると主張する。これは、相補分布していることを必要条件とすると、その他の観点で補充法とみなせるものが補充法の射程から外れてしまうためである。日本語標準語における補充法を対象とした田川（2019: 31）も、語形が相補分布することを典型的な補充法の条件（「唯一性条件」）とみなしつつ、語形が相補分布しないものも（非典型的な）補充法として認定する。本稿は、Meščuk（1994）、田川（2019）にならい、Veselinova（2006）が「交替」と呼ぶものも「補充法」と呼ぶ<sup>2</sup>。

強補充法が成立する過程においては、類似するものの異なる意味をもつ語根であったものが、通時変化の結果として同じ語根の異形態としてふるまうようになる。共時的な観点で補充法と類義語を区別する上で重要なのは、語根 A と語根 B に意味的な違いがあるか否かという点である。両者に意味的な違いがないのであれば、両者は補充法の関係にあると分析できる。語根 A と語根 B に意味的な違いがあるのならば、これらは類義語の関係にあり、一方は defective word（Haspelmath and Sims 2010: 180, Matthews 2014: 96）、すなわちその語類に属す他の語から想定される語形の一部を欠く欠落語であると分析できる。

### 3. 九州方言における itar- を含む語の先行研究

本節では、九州方言における itar- を含む語についての先行研究を概観する。3.1 節では、九州方言の一部において itar- 系列形式が活用形の多くを欠き、おおよそ「行く」という意味をもつという特徴が見られることを示す。3.2 節では、ik- 系列形式と itar- 系列形式の双方を対象としている先行研究を概観し、① ik- 系列形式と itar- 系列形式との関係はどのようなものか、② itar- を含む語が多く活用形を欠くのはなぜか、の二点が研究上の論点となることを示す。3.3 節、3.4 節ではそれぞれの観点についての先行研究の見解を紹介し、3.5 節で検証すべき課題を示す。

#### 3.1. itar- を含む形式の分布と記述された活用形の偏り

本節では、「行く」という意味をもつ itar- という形式が九州方言の中でも肥筑方言と薩隅方言で報告されていること、これらの方言において報告されている活用形が継起接辞をとったものに偏ることを示す。

九州方言は、主に共時的な語彙・音韻・形態統語的特徴によって、東部で話される豊日方言、北西部で話される肥筑方言、南部で話される薩隅方言に大別され（東条 1953）、本稿が対象とする柳川方言は、肥筑方言に属する（岡野 1983）。itar- 系

<sup>2</sup> ただし、Meščuk（1994: 353）、田川（2019）が相補分布しない補充法の例として挙げている例と柳川方言の「行く」を表す動詞（4 節で詳述）とを比較すると、諸形式の出現環境の分布は大きく異なっている。この点については、柳川方言における「行く」を表す動詞の記述（4 節）を示した後 4.5 節で議論する。なお、本注および 4.5 節の内容については、査読者にいただいたご指摘によるものが大きい。

列形式は、『日本方言大辞典』の「いたる」の項目<sup>3</sup>（佐藤 1989: 181）のほか、肥筑方言圏、薩隅方言圏の辞書・語彙集にも立項されており、「行く」という標準語訳が示されている<sup>4</sup>（福岡県筑後地方方言（松田 1991: 68）、佐賀県方言（志津田 1999: 28）、長崎県諸方言（原田 1993: 48）、熊本県諸方言（藤本 2011: 159）、鹿児島県方言（大久保 2002: 137）、宮崎県西米良村方言（倉田 1973: 810）など多数）。これらの方言で記述されている形式は、「イタチ」、「イタツテ」、「イタテ」など、itar- および ita- が継起接辞をとった形式に偏る。ik- 系列形式と itar- 系列形式の両方を扱った先行研究においても、itar- 系列形式の例として挙げられている形式は継起接辞と共に起る例に偏る（表 2）。

表 2 九州方言における「行く」を表す語根の形式（表記は筆者一部変更）

方言	形式	itar-, ita- が出現する環境
佐賀県北山方言 (小野 1969: 386–387)	ik-, it-, i-, itar-, ita-	継起接辞 (-te) が後続
長崎県諸方言 (愛宕 1983)	ik-, it-, i-, itar-, ita-	継起接辞 (-te)、完了接辞 (-tor)、条件接辞 (-eba, -rya) が後続
鹿児島県諸方言 (木部 2014)	ik-, it-, ita-	継起接辞 (-te) が後続
鹿児島県串木野方言 (黒木 2024)	ik-, it-, i-, ita-	継起接辞 (-te) が後続

<sup>3</sup>『日本方言大辞典』の「いたる」の項目には、「いたる」ではないと考えられる形式が含まれる。『日本方言大辞典』は福岡県嘉穂郡穂波町太郎丸方言（占部 1966: 66）のナンカ チョコット モツテ イカナト オモーチカイ イタツタイ。「何かちよっと持っていかなければと思っ て行ったんだよ。」を「いたる」の例として挙げている。これは、イタツタイを itar-u=tai（いたる -NPST=SFP）と分析しているものと考えられる。しかし、動詞を非過去形とみなしているこの分析は、標準語訳が過去形である（「行ったんだよ」）ことを説明できない。当該形式は、西日本諸方言に広く見られる「行く」という語根の異形態 i- を含む形式、すなわち i-ta=tu=tai（行く -NPST=FMN=SFP、重子音は形式名詞と終助詞間の形態音韻交替により生じたもの）とも分析可能であり、標準語訳の「行ったんだよ。」を踏まえるとこの分析が妥当である。

<sup>4</sup>豊日方言では、同様の現象は報告されていない（例：宮崎県椎葉村尾前方言（宮岡 2022、筆者フィールドデータ）、大分県方言（糸井 1983）、大分県大野郡野津町西神野方言（糸井 1960）、大分県九重町方言（糸井 1964）、大分県由布市庄内町方言（松田 2017）など）。また、肥筑方言圏・薩隅方言圏における動詞形態論を対象とした研究の多くは、itar- を含む形式について言及していない（福岡県福岡市方言（平塚 2014）、福岡県八女方言（内山 1973）、柳川方言（松岡 2021, 2022、Matsuoka 2022）、佐賀県北山方言（原田 2019）、長崎県宇久島野方言（中村 2019）、長崎県福江島崎山方言（立山 2020）、長崎県雲仙市南申山町鬼池方言（野田・東出 2024）、熊本県菊池方言（藤本 2002: 105–106）、熊本県菊鹿方言（立花 2022）、鹿児島県甌島里方言（黒木・野間 2015）、鹿児島県内之浦方言（高城 2022））。九州方言を対象とした有元光彦氏の一連の研究において、「行く」は不規則語幹であり、継起接辞をとる際に ita を含む形式 (itate) が出現することが記述されている（熊本県天草方言（有元 2005）、葦北郡津奈木町方言、人吉市方言、球磨郡五木村方言（有元 2011）、長崎県中北部本土方言（有元 2008）、鹿児島県日置方言、知覧方言、南大隅佐田方言（有元 2017）など）。有元氏の一連の研究は、動詞が継起接辞をとりそれに補助動詞が後続する環境に着目している。このため、「行く」を表す語根に継起接辞以外の接辞（例：否定接辞）が後続する場合にどのような形式が現れるかについての言及はなく、ik- 系列形式が出現するか否か、出現する場合にはそれと ita を含む形式がどのような関係にあるかは不明である。

itar- 系列形式の具体例として挙げられている形式が継起接辞をとった例に偏るのは、これらの方言において、これらの形式が、継起接辞が後続する際に偏って、あるいは限定して出現する可能性を示唆する。実際、鹿児島方言（大久保 2002: 137, 木部 2014）では、itar- が想定される活用形の多くを欠き、継起接辞のみをとることが指摘されている。

### 3.2. itar- を含む語を分析する上での論点

itar- を含む語について考える上で論点となるのは、① itar- 系列形式と ik- 系列形式との関係はどのようなものか、② itar- が想定される活用形の多くを欠くのはなぜか、の二点である。先行研究は、大きく以下の二つの立場に分かれる。一つは、①両者はアスペクトの観点で使い分けられる類義語であり、② itar- を含む語が活用形の多くを欠くのは意味的な要因によると主張するもの（木部 2014）である。もう一つは、①両者に意味の違いはなく同一の語彙素に属するものであり、② itar- を含む語が活用形の多くを欠くのは形態論的な問題である、すなわち補充法が生じていると解釈可能であるもの（小野 1969: 386-387, 木下 1996: 22, 井島 1984: 68, 黒木 2024）である。ただし、このような立場をとっていることは、「行く」を表す動詞の活用形として itate のような形式を挙げていることから推測可能ではあるものの、明示されていない。さらに、先行研究では検討されていないものの、① ik- と itar- との間に意味の違いがあり、② itar- 系列形式が活用形を欠くことは形態論的な問題であるという可能性、すなわち、itar- は欠落動詞（defective verb）であるという分析もありうる。上記の分析をそれぞれ「意味分析」、 「補充法分析」、 「欠落動詞分析」と呼び表 3 にまとめる<sup>5</sup>。

表 3 論点の整理

	ik- と itar- に意味の違いがあるか	itar- が活用形を欠くことは意味によって説明可能か
意味分析（木部 2014：鹿児島諸方言）	○	○
補充法分析（小野 1969: 386-387：佐賀県北山方言, 木下 1996: 22：佐賀県南部方言, 井島 1984: 68：鹿児島県出水方言, 黒木 2024：鹿児島県串木野方言）	×	×
欠落動詞分析	○	×

以下では、それぞれの観点についての先行研究の分析を確認した上で（3.3 節, 3.4 節）、柳川方言において上記のいずれの分析が適切かを判断するための基準を示す（3.5 節）。

<sup>5</sup> 観点の組み合わせとしては、① ik- 系列形式と itar- 系列形式に意味の違いがなく、② itar- 系列形式の活用形の欠落が意味によって説明可能であるという組み合わせもありうる。しかし、もしそうであるならば、itar- 系列形式と同じ意味をもつ ik- 系列形式でも同様に活用形の欠けが見られるはずである。このような方言は現時点で発見されていないため、考察外とする。

### 3.3. ik- 系列形式と itar- 系列形式に意味の違いがあるか

本節では、ik- 系列形式と itar- 系列形式に意味の違いがあるか否かについての先行研究の議論を示す。木部（2014）は、鹿児島各地で収集された昔話資料を文字化した『鹿児島ふるさとの昔話』（下野 2006）を資料に鹿児島諸方言における ik- 系列形式、itar- 系列形式を考察し、両者は類義語の関係にあると主張する。具体的には、itar- に継起接辞が後続する例（全 75 例）、ik- に継起接辞が後続する例（全 9 例）を考察した上で、それぞれの出現する文脈が以下のものであると指摘する。まず、itar- に継起接辞が後続する場合には、(4) に示す特徴を全て備えている。

- (4) a. 従属節の事象と主節の事象が時間的先後関係にある。
- b. 従属節の事象が主節の事象を実現することを目的とする。
- c. 従属節と主節がともに意志動詞で形成されている。
- d. 従属節と主節の主語が同じである。
- e. 従属節の事象が主節の事象が生起する起因となっていない。

一方で、ik- に継起接辞が後続する場合には、(4) に示した五つの特徴が揃っておらず、いずれかを欠いている。これらのことから、itar- はある目的のためにある場所へ移動し、到着することを示すのに対し、ik- は単にある場所へ移動するということのみを意味すると主張する。(5) に itar- 系列形式の例を、(6) に ik- 系列形式の例を示す。ik- 系列形式については、(4) に示した特徴のいずれを欠くかを合わせて示す。なお、(4d) については、この特徴を欠く例は挙げられていない。

- (5) itar- 系列形式（木部 2014: 78 (14), 訳は本稿筆者による）

何か魔性の者が棲んでおるようじゃから、わや、いたて見てこい  
「何か魔性の物が住んでいるようだから、お前は行って見てこい。」

- (6) ik- 系列形式（訳は本稿筆者による）

- a. (4a) を欠く例（付帯状況の例）

ダンザは先にやって、うさぎはあとから行って、ダンザのうしろで、火打ち金と火打ち石を打ち合わせたそうじゃ。

「ダンザ（狸）は先に行かせて、うさぎはあとから行って（＝うしろから歩いて行きながら）、火打ち金と火打ち石を合わせたそうだ。」

（木部 2014: 75 (26)）

- b. (4b, c, e) を欠く例

山姥はたきもん取りい行って、留守じゃったそうじゃなあ。

「山姥は薪をとりに行って、留守だったそうだ。」（木部 2014: 76 (21)）

一方で、佐賀県北山方言を対象とした小野（1969: 386–387）、佐賀県南部方言を対象とした木下（1996: 22）、鹿児島県串木野方言を対象とした黒木（2024）は、ik- 系列形式のみならず itar- 系列形式も「行く」という動詞の活用形として示している。このことから、これらの先行研究は両者に意味の違いがないと分析している

と考えられる。ただし、これらの研究は、両者に意味の違いがあるかどうかの検証はおこなっていない。

### 3.4. itar- 系列形式が想定される活用形を欠くのはなぜか

3.1 節で見たように、itar- 系列形式は多くの九州方言で活用形を欠くことが示唆され、あるいは明示的に指摘されている。本節では、先行研究が itar- 系列形式が想定される活用形を欠くことをどのように分析しているかを確認する。

前節で見た木部（2014）は、鹿児島諸方言を対象に、以下の二点を指摘している。まず、『鹿児島ふるさとの昔話』（下野 2006）において、継起接辞が後続する場合にのみ itar- 系列形式が出現している。次に、木部自身が鹿児島県各地（詳細な地域不明）でおこなったエリシテーション調査においても、itar- 系列形式が継起接辞をとる例は容認されるものの、非過去接辞（イタッ）、過去接辞（イタッタ）、否定接辞（イタラン）、意志接辞（イタロ）、命令接辞（イタレ）をとった形式は容認されない。木部（2014）は、このように itar- が活用形の多くを欠き、継起接辞とのみ共起することを、itar- のもつ「ある目的のためにある場所へ移動し、到着する」（木部 2014: 73）という意味によって説明する。すなわち、itar- は到着を表すという意味的な特徴をもつために、完了を含意する継起接辞をとる場合には出現できないのに対し、他の接辞が後続する場合には出現しない。なお、同じく完了を含意する過去接辞が後続する場合に itar- が出現できない理由について、木部（2014）は言及していない。

一方、佐賀県北山方言（小野 1969: 386–387）、佐賀県南部方言（木下 1996: 22）、鹿児島県串木野方言（黒木 2024）では「行く」を表す動詞として、ik- 系列形式（例：iku「行く」）と継起接辞（-te）が後続する場合に itar- 系列形式（例：itate「行って」）が記述されている。これは、itar- の出現環境を形態論的観点から説明していると解釈可能である。

### 3.5. それぞれの分析の予測

ここまで、先行研究を概観し① ik- 系列形式と itar- 系列形式は類義語の関係にあるか、② itar- 系列形式が活用形の多くを欠くのは意味によって説明できるか、の二点が論点となることを確認した。以下にいずれの分析が適切かを判断するために検証すべきことを示す。

まず、ik- 系列形式と itar- 系列形式との関係について、意味分析と欠落動詞分析は、両者が類似するものの異なる意味をもつということを前提とする。類義語の関係にある語には、一方を用いることが可能であるものもう一方を用いることができないという文脈が存在する（Cruse 1986: 268）。両者が類義語の関係にあるのならば、ik- が継起接辞をとったものと itar- が継起接辞をとったもののいずれが容認されるかが文脈によって異なる例があること、あるいは、両者ともに容認されても意味の違いがあることを予測する。一方、補充法分析は、文脈によらずいずれの形式も容

認されることを予測する。

次に、itar- が継起接辞をとる場合にのみ出現することが itar- が到着を含意するという意味の特徴によって説明できるかについて述べる。これは itar- と継起接辞の間に、アスペクトに関与しない派生接辞（例：尊敬接辞）が存在しうることによって判断できる。itar- が到着を含意するために継起接辞と共起するのならば、語根と継起接辞の間に尊敬接辞などの派生接辞が出現する際にも itar- 系列形式が出現することを予測する。一方、itar- が活用形の多くを欠くのが、意味的要因ではなく形態論的な要因によるならば、語根と -te との間に尊敬接辞など他の接辞が出現する場合には itar- 系列形式が出現しないことを予測する（表4）。

表4 それぞれの分析による itar- 系列形式の出現予測

	到着を含意することが要因である場合	到着を含意することが要因でない場合
語根 - 継起接辞	○ (itatte ; 語根 -SEQ)	○ (itatte ; 行く -SEQ)
語根 - 接辞 - 継起接辞	○ (itarinahatte ; 語根 -THM-HON-SEQ)	× (*itarinahatte ; 行く -THM-HON-SEQ)

次節では、柳川方言における ik- 系列形式と itar- 系列形式に意味的な違いがあるか、itar- 系列形式の活用形の欠落が itar- が到着を含意するという意味的要因によって説明できるかを検証する。

#### 4. 柳川方言における「行く」を表す動詞のふるまい

本節では、柳川方言における「行く」を表す動詞の意味的、形態論的ふるまいを記述する。調査協力者は三名（1943年生まれの話者A、B、1948年生まれの話者C）であり、言語形成期を柳川で過ごしている。考察対象とするデータは、対面でのエリシテーション調査によって得たデータと、対面調査時に収集した自然談話データである。エリシテーション調査の際には、柳川方言として自然な形式を尋ねている。以下では、4.1節で前提となる柳川方言における動詞形態論の概要を示す。4.2節で、前節で見た①、②を検証し、① ik- 系列形式と itar- 系列形式に意味の違いが見出せないこと、② itar- 系列形式が想定される活用形を欠くことは、itar- が到着を含意するという意味的要因によっては説明できないことを示し、4.3節で、補充法分析が適切であると主張する。4.4節で、補充法分析によって「行く」を表す動詞の活用を記述する。4.5節で、柳川方言における「行く」を表す動詞に見られる補充法が補充法研究に与える示唆を示す。

##### 4.1. 柳川方言における動詞

本節では、柳川方言における「行く」を表す動詞の活用を示すに先立ち、動詞形態論の概要を示す。柳川方言における動詞形態論の詳細については、松岡（2021）、松岡（2022）、Matsuoka（2022）を参照されたい。

派生接辞には、ヴォイス接辞（使役 -sase, 受動 -rare）, 可能接辞（-das, -rare）, アスペクト接辞（未完了 -yor, 完了 -tor, 予期完了 -tok）, 尊敬接辞（-mes, -nahar, -rass）がある。(7) にこれらの相互承接を示す。

(7) 語根 (-sase) (-rare) (-tor/-tok) (-yor) (-mes) (-nahar/-rass) - 屈折接辞

屈折接辞には表5に示すものがある。表5には、結論を先取りし、補充法分析をとった上で、「行く」を表す諸語根にそれぞれの屈折接辞が後続した形式を合わせて示す。表5には、ik- およびその弱補充形である it-, i- も合わせて示している。表5中の\*は、3名の話者全員がその語形を容認しないことを示す。itar- 系列形式は、標準語の「至る」がもつ「到着する」という意味はもたない。\*を付された itar- 系列形式も、「行く」に相当する意味だけでなく、標準語の「至る」がもつ「到着する」という意味でも容認されない。なお、多くの語形については話者間で容認度が一致するものの、一部の語形については話者間で容認度が一致しない(4.4節で後述)。話者によって容認度に差がある語形には、?を付す。

表5 動詞がとる屈折接辞(松岡(2021: 42)に各語形を合わせて示したもの)

環境	法		肯定	否定
文終止・ 名詞修飾	直説法	非過去	-ru (iku, *itu, *iru, *itaru)	-n (ikan, *itan, *in, *itaran)
		過去	-ta (*iita, itta, ita, ?ita(t)ta)	-n=yat-ta
	義務法	非過去	-yan (ikayan, *itayan, *iyan, *itarayan)	
		過去	-yan=yat-ta	
文終止	推量法		-u (ikoo, *itoo, *iroo, *itaroo)	-n=yar-oo
	意志法		-u (ikoo, *itoo, *iroo, *itaroo)	
	命令法		-ro/-re/-i (ike, *ite, *ire, *itare)	
副詞節		継起	-te (*iite, itte, ?ite, ita(t)te)	-nna/-dena/-zi (ikanna, *itanna, *inna, *itaranna)
		条件	-tara (*iitara, ittara, itara, ?ita(t)tara)	
		並列	-tai (*iitai, ittai, ita, ?ita(t)tai)	
		目的	-ge	

派生接辞のうち完了接辞 -tor と予期完了接辞 -tok は、通時的には継起接辞と補助動詞 (-tor は or- 「いる」, -tok は ok- 「置く」) に由来する。屈折接辞のうち、-ta, -tara, -tai は、通時的には継起接辞と補助動詞 ar- が屈折接辞をとったものに由来する。1節で前述したように、本稿はこれらの接辞を T 接辞と呼ぶ。T 接辞とその接続先の間には形態音韻規則が適用される(松岡 2021: 43-44)。以下に、松岡(2021:43-44)に示されている形態音韻規則を、これらが適用される順に示す。

(8) a. 語幹末子音が /b, m, n, g/ のとき、接辞頭の /t/ を有声化せよ。

例：tob-ta → tob-da (飛ぶ -PST), sikom-ta → sikom-da (仕込む -PST)

b. 語幹末子音が /b, m, w/ であるとき、これを /u/ に交替せよ。語幹末子音が /k, g, s/ のとき、これを /i/ に交替せよ。

例：tob-da → tou-da (飛ぶ -PST), sikom-da → sikou-da (仕込む -PST), kak-ta → kai-ta (書く -PST), hanas-ta → hanai-ta (話す -PST)

c. 語幹末子音が /r/ の場合、これを /t/ に同化せよ。

例：hasir-ta → hasit-ta (走る -PST)

d. 母音連続 ai を ee, ui を ii, au を oo, ou を oo に融合させよ。

例：kai-ta → kee-ta (書く -PST), tou-da → too-da (飛ぶ -PST)

e. 語幹の左端からフットを形成し、フット境界が母音融合の結果生じた長母音を分断するとき、二番目の母音を削除せよ(それぞれのフットを [] で囲って示す)。

例：[siko]o-da → siko-da (仕込む -PST), [hane]e-ta → hane-ta (話す -PST) (cf. keeta, \*keta (書く -PST))

## 4.2. 各論点の検討

本節では、これまでの研究で論点となっている① ik- 系列形式と itar- 系列形式に意味の違いがあるか、② itar- 系列形式が活用形を欠くことは itar- が到着を含意するという意味的要因によって説明可能かを検証する。

### 4.2.1. ik- 系列形式と itar- 系列形式の意味

本節では、柳川方言において、ik- 系列形式と itar- 系列形式が類義語の関係にあるか否かに着目する。3.5 節で見たように、ある語とある語が類義語の関係にある場合、両者のうち一方のみが許容されるような文脈が存在する。以下では、まず木部 (2014) が鹿児島諸方言の itar- に見られると指摘する意味的な制限が、柳川方言の itar- では観察されないことを示す。その後、木部 (2014) が考察していないどのような要素と共起するか、本動詞用法と補助動詞用法、主節用法という観点にまで観察対象を広げても、継起接辞が後続する場合には ik- 系列形式と itar- 系列形式の容認度に差がなく、話者が意味的な違いを感じないことを示す。

3.3 節で述べたように、木部 (2014) は鹿児島諸方言において、itar- に継起接辞が後続する形式は、従属節の事象と主節の事象が時間的先後関係にあり、従属節と主節がともに意志動詞で形成され、従属節の事象が主節の事象の実現を目的とし、従属節と主節の主語が同じであり、従属節の事象が主節の事象が生起する起因となっていないという五つの特徴 (4) を全てもつとする。一方、柳川方言においては、エリシテーションデータ、自然談話データともに、木部 (2014) が鹿児島諸方言に対して指摘するような意味的特徴は観察されない<sup>6</sup>。まず、エリシテーションデータ

<sup>6</sup> 本稿初稿では、エリシテーションデータにおいて ik- 系列形式と itar- 系列形式に意味の違い

について、上記のいずれかを欠く場合であっても、継起接辞が後続していれば、ik- 系列形式と itar- 系列形式の両方が容認される。以下に例を示す。

- (9) 従属節の事象が主節の事象の実現を目的とせず、主節述語が非意志動詞であり、従属節の事象が主節の事象が生起する起因となっている例 ((4b, c, e) を満たさない例)

*kotobukiyani* {itte/ itatte}                      *okaasanto*                      *tureusinoota.*  
 kotobukiya=ni {it-te/ itar-te}                      okaasan-Ø=to                      tureusinaw-ta  
 寿屋 =DAT {行く -SEQ/ 行く -SEQ} お母さん -SG=COM はぐれる -PST  
 「(A は) 寿屋 (デパート) に行って、お母さんとはぐれた。」

- (10) 従属節の主語と主節の主語が異なる例 ((4d) を満たさない例)

*ziisanna*                      *yamasan* {itte/ itatte}                      *baasanna*  
 ziisan=wa                      yama=san {it-te/ itar-te}                      baasan=wa  
 おじいさん =TOP 山 =ALL {行く -SEQ/ 行く -SEQ} おばあさん =TOP  
*kawasan ita.*  
 kawa=san i-ta  
 川 =ALL 行く -PST  
 「おじいさんは山へ行って、おばあさんは川へ行った。」

自然談話データを見ても同様に、ik- 系列形式、itar- 系列形式のいずれが出現するかと (4) に示す特徴との間に明確な関連はない。表 6 に、自然談話においてこれらの語根が出現する例のうち、(4) に示す特徴の全てを満たしている例、一部あるいは全ての特徴を満たさない例を示す。ik- 系列形式、itar- 系列形式のいずれも、(4) に示す特徴の全てを満たす例と満たさない例があり、両形式ともに特徴の全てを満たさない例が多い。考察外の列に示したのは、(4) に示す特徴を満たしているか検証できない例である。木部 (2014) は、itar- を含む従属節と主節との関係がどのようなかを、itar- の特徴として挙げている。自然談話には、主節のない例(「行って」に相当する形式で文が終止する例)、「行ってみる」のように「行って」が補助動詞構造の前部要素としてふるまっており、従属節と主節の関係にあるとみなせない例があり、これらを考察外としている。

表 6 自然談話から見た各語根の出現数と意味との関連

	全ての特徴を満たす例	全てあるいは一部の特徴を満たさない例	考察外
ik-	1	4	7
itar-	4	19	38

が見られるか否かのみを検証していた。自然談話データの検証は、査読者の「堅実な議論のために、自然談話においても ik-, itar- に意味的な差異がないかを検証する必要がある」という趣旨のコメントを受けておこなった。

次に、木部（2014）が考察していない観点まで範囲を広げ、ik- 系列形式と itar- 系列形式に意味の違いがあるかを考察する。以下では、ik- 系列形式と itar- 系列形式との間に、共起する要素の違いが観察されないこと、そして、両者とも同様の用法をもつことを示す。

表7は、ik- に継起接辞が後続した形式と itar- に継起接辞が後続した形式とで共起するものが異なるかをまとめたものである。両形式はともに表7に示すものと共起し、イディオム的な表現である「知らせが行く」、「嫁に行く」、「うまくいく」、「納得がいく」でも両者が同様に用いられる<sup>7</sup>。話者の内省によると、どちらの形式を用いても意味に違いはない。なお、両形式がどのようなものと共起するかを特定するにあたり、バルデシ（編）（2023）を参考にした。

表7 ik- 系列形式と itar- 系列形式に継起接辞が後続した形式の容認度

共起するもの	例文	ik- 系列形式 (itte) が容認されるか	itar- 系列形式 (ita(t)te) が容認されるか
目的地	太郎は図書館に行って	○	○
起点	私は図書館から行って	○	○
手段	太郎はバスで行って	○	○
移動の目的	太郎は食事に行って	○	○
共同行為者	太郎は次郎と行って	○	○
経路	太郎は田んぼを行って	○	○
移動の様態	ゆっくり行って	○	○
組織	私は高校に行って	○	○
知らせ	知らせが行って	○	○
家族	嫁に行って	○	○
順調な進行	仕事がうまく行って	○	○
心的な変化	納得が行って	○	○

次に、本動詞用法と補助動詞用法について述べ、ik- 系列形式と itar- 系列形式にはこの点でも違いが観察されないことを示す。ik- 系列形式は、本動詞として、様々な補助動詞（例：ku- 「くる」、simaw- 「しまう」、deke- 「よい」）と共起しうる。itar- 系列形式も ik- 系列形式と同様に、様々な補助動詞と共起しうる (11) (12) (13)。なお、(11) (12) に示す例では、本動詞がとっていると考えられる継起接辞が表層では現れず、本動詞と補助動詞の間に重子音が生じている。本動詞語根末の分節音的特徴が本動詞と補助動詞の間に重子音が生じるか否かに影響を与える現象は「テ

<sup>7</sup> 田川（2019: 31）は、「補充法」を認定する条件のうち「同一性条件」が最も決定的な条件であるとす。「同一性条件」とは、「当該の形態が基本となる形態と同一の Root/ 語彙素を持つ」（田川 2019: 30-31）という条件である。これを検証するテストは当該の語彙素を含むイディオムにおいて補充形とみなしうる語形が出現できるか否かであり、このテストをパスするならば同一性条件を満たすとす。柳川方言の itar- を含む語形は、「行く」という意味を表す動詞を含むイディオムにおいても出現可能であり、同一性条件を満たしている。

形現象」(有元 2001) と呼ばれ、肥筑方言、薩隅方言圏で広く見られる。重子音化は義務的ではなく、(11)、(12) ではそれぞれ {itte/ita(t)te} kita, {itte/ita(t)te} simota という形式も容認される<sup>8</sup>。

- (11) *oryaa*            {*ikkita*                            / *itakkita*}*ban.*  
 ori-Ø=wa    {it-te ki-ta                            / itar-te ki-ta}=ban  
 1-SG=TOP    {行く -SEQ ENDO-PST / 行く -SEQ ENDO-PST}=SFP  
 「私は行ってきましたよ。」
- (12) *tookaa*            *tokosan*            {*issimota*                            / *itassimota*}.  
 too-kar-Ø    toko=san            {it-te simaw-ta                        / itar-te simaw-ta}  
 遠い -ADJZ-NPT    ところ =ALL {行く -SEQ PF-PST / 行く -SEQ PF-PST}  
 「遠いところに行ってしまった。」
- (13) {*itte/ ita(t)te*}                            *dekenban.*  
 {it-te/ itar-te}                            deke-n=ban  
 {行く -SEQ/ 行く -SEQ}            PERM-NEG=SFP  
 「行ってはいけませんよ。」

ik- 系列形式が補助動詞として用いられる場合、話し手ないしその身近な人から離れる遠心性と、時間的に発話時から遠い方向性を表す。(14) に示すように、itar- 系列形式も ik- 系列形式と同様に補助動詞として用いられ、話者の内省では両者に意味上の違いはない。

- (14) *oniginno*            *korode*            {*itte/ itatte*}  
 onigiri=no    korob-te            {it-te/ itar-te}  
 おにぎり =NOM    転がる -SEQ    {EXO-SEQ/ EXO-SEQ}  
*taberarenayatta.*  
 tabe-rare-n=yar-ta  
 食べる -POT-NEG=COP-PST  
 「おにぎりが転がって行って、食べられなかった。」
- (15) *dondon*            *karwatte*            {*itte/ itatte*}                            *simau.*  
 dondon        kawar-te            {it-te/ itar-te}                            simaw-ru  
 どんどん    変わる -SEQ    {EXO-SEQ/ EXO-SEQ}            PF-PST

<sup>8</sup> (11)、(12) について、査読者より、*ikkita*, *issimota* の形式はそれぞれ it- に継起接辞が後続する例ではなく、i- に継起接辞が後続する例と考えられないか、両者の区別は可能か、という趣旨のコメントをいただいた。この点について、話者 A, B は i- に継起接辞が後続する形式を許容しない(表 11)。このため、話者 A, B の体系では、*ikkita* は it- に継起接辞が後続した形式が基底にあると考える。話者 C については、it- に継起接辞が後続した形式と i- に継起接辞が後続した形式の両方を許容する(表 10)。重子音化が生じない場合に it-te と i-te の両形式が許容されるため、重子音化が生じた場合にも基底には it- あるいは i- のいずれかがあると考え。ただし、重子音化が生じた場合には、基底がいずれであるかは区別できない。

「どんどん変わっていってしまう。」

次に、主節用法について述べる。柳川方言においては、継起接辞 *-te* が文末に位置する構造が非難の意味を表す。この用法においても、*ik-* 系列形式、*itar-* 系列形式の両形式が用いられ、話者の内省では両者に意味上の違いはない。

- (16) *maata nomige* {*itte/ itatte*}.  
*maata nom-i-ge* {*it-te/ itar-te*}  
 また 飲む *-THM-PURP* {行く *-SEQ/* 行く *-SEQ*}  
 「(酒を控えた方がいいと言われていたのに) また飲みについて！」

#### 4.2.2. *itar-* 系列形式が活用形を欠くことは意味によって説明可能か

本節では、*itar-* 系列形式が想定される活用形の多くを欠くことは *itar-* が到着を含意するという意味的要因によって説明可能かを検証する。3.5 節で見たように、意味分析は、到着を含意するような文脈においては「行く」を表す語根に継起接辞が直接後続する場合だけでなく、語根と継起接辞の間に (アスペクトに関与しない) 他の接辞が存在する場合にも、*itar-* 系列形式が出現することを予測する。柳川方言においては、一部の環境を除き、「行く」を表す語根に派生接辞が後続し、それに継起接辞が後続する場合には、*itar-* 系列形式が容認されない。すなわち意味分析の予測に反するふるまいを見せる。「行く」を表す語根と継起接辞との間に完了接辞 *-tor*、予期完了接辞 *-tok* が介在する場合には *itar-* が出現可能であるが、これらの接辞は継起接辞を通時的に含む *T* 接辞である。

(17) は「行く」を表す語根に継起接辞が後続する例であり、*itar-* 系列形式が出現可能である。(18) は「行く」を表す語根に派生接辞 (尊敬接辞 *-naha*) が後続し、それに継起接辞が後続している。このとき、*itar-* 系列形式は出現できない。表 8 に示すように、派生接辞 (完了接辞 *-tor*、予期完了接辞 *-tok* 除く) が介在する場合にも *itar-* 系列形式は出現できない。

- (17) *taroo-wa tosyokan-san* {*itte/ itatte*}  
*taroo=wa tosyokan=san* {*it-te/ itar-te*}  
 太郎 *=TOP* 図書館 *=ALL* {行く *-SEQ/* 行く *-SEQ*}  
 「太郎は図書館に行って、」
- (18) *tosyokan-san* {*ikinabatte/ \*itannabatte*}  
*tosyokan=san* {*ik-i-naha-te/ \*itar-i-naha-te*}  
 図書館 *=ALL* {行く *-THM-HON-SEQ/* 行く *-THM-HON-SEQ*}  
 「(先生は) 図書館にいらっしゃって、」

表 8 語根 - 派生接辞 - 屈折接辞の構造における各形式の出現

	-sase	-rare	-yor	-mes	-rass
ik-	○ (ik-ase-te)	○ (ik-are-te)	○ (ik-i-yot-te)	○ (ik-i-mes-i-te)	○ (ik-asi-te)
itar-	× (*itar-ase-te)	× (*itar-are-te)	× (*itar-i-yot-te)	× (*itar-i-mes-i-te)	× (*itar-asi-te)

### 4.3. 柳川方言においてはどの分析が適切か

本節では、4.2 節で見た状況をもとに、少なくとも柳川方言においては、補充法分析が適切であると主張する。3 節で述べたように、柳川方言において ik- 系列形式と itar- 系列形式がどのような関係にあるかを考える上では、① ik- 系列形式と itar- 系列形式に意味の違いがあるか、② itar- 系列形式が活用形を欠くことは itar- 系列形式が到着を含意するという意味的要因によって説明可能かが論点となる。柳川方言においては、ここまで見てきたように、①両者に意味の違いが観察されず、② itar- 系列形式の活用形の欠落は、itar- が到着を含意するという意味的要因によって説明できない。よって、補充法分析が適切であると主張する。

表 9 諸分析 (表 3 の再掲)

	ik- と itar- に意味の違いがあるか	itar- が活用形を欠くことは意味によって説明可能か
意味分析 (木部 2014 : 鹿児島諸方言)	○	○
補充法分析 (小野 1969: 386-387 : 佐賀県北山方言, 木下 1996: 22 : 佐賀県南部方言, 井島 1984: 68 : 鹿児島県出水方言, 黒木 2024 : 鹿児島県串木野方言)	×	×
欠落動詞分析	○	×

### 4.4. 「行く」を表す動詞に見られる不完全な補充法

本節では、補充法分析を採用した上で「行く」を表す動詞の活用を記述する。まず、エリシテーションデータに基づいていずれの語根にいずれの接辞が後続しうるかを記述する。その後、筆者が収集した自然談話資料に基づいてそれぞれの語根が出現する頻度を確認し、複数の語根が出現可能な環境であってもどの語根が出現するかに頻度の差があることを示す。

「行く」を表す形式には、ik- 系列形式と itar- 系列形式がある。ik- 系列形式は、ik-, it-, i- の三つの総称である。このうち、it-, i- の形式は (8) に示した形態音韻規則で導くことのできない形式であるため、音韻的な類似点はあるものの通常の音韻規則で説明できない弱補充法と位置付ける<sup>9</sup> (日本語標準語の *it-te* 「行って」に見ら

<sup>9</sup> ik- の形式と T 接辞 (例: 継起接辞 -te) との間に (8) に示した形態音韻規則が適用された場合、

れる同様の不規則性について、佐々木 2021: 240)。話者間でどの語根がどの環境に出現するかに差があるため、表 10 と表 11 に分けて示す。itar- 系列形式については、itar-, ita- の間で出現できる環境に違いがないため、まとめて示す。

表 10 諸形式の出現環境（話者 C, △は調査回によって内省に揺れがあることを示す）

		後続する接辞			
		T 接辞			T 接辞以外
		-te	-tor, -tok	-ta, -tara, -tai	
ik- 系列形式	ik-	×	×	×	○
	it-	○	○	○	×
	i-	○	×	○	×
itar- 系列形式	itar-, ita-	○	○	△	×

表 11 諸形式の出現環境（話者 A, B）

		後続する接辞			
		T 接辞			T 接辞以外
		-te	-tor, -tok	-ta, -tara, -tai	
ik- 系列形式	ik-	×	×	×	○
	it-	○	○	○	×
	i-	×	×	○	×
itar- 系列形式	itar-, ita-	○	○	×	×

表 10, 11 に示すように、ik- 系列形式のうち ik- は T 接辞以外が後続する場合に現れる。ik- 系列形式のうち弱補充形である it-, i-, そして itar- 系列形式は、T 接辞の一部）が後続する場合に出現する<sup>10</sup>。it- は 3 名の話者ともに、すべての T 接辞が後続する場合に出現できる。i- の出現環境は話者によって差があり、話者 C の体系（表 10）では -te, -ta, -tara-, -tai が後続する場合に、話者 A, B の体系（表 11）では -ta,

予想される形式は iite である。しかし、この形式は容認されず、予想された形式と音韻的に類似するものの異なる itte, ite が現れる。本稿では、これらの形式を導く音韻規則を立てるのではなく、it-, i- という語根形式を別個に立てる。i- は、柳川方言だけでなく西日本方言（例：宮崎県椎葉村尾前方言（宮岡 2022: 709）、滋賀県湖東方言（逸民 2022: 17）、京都府京都市方言（松丸 2014: 92）、高知県宿毛市方言（松丸 2017: 129））に広く見られ、室町時代語（湯澤 1955: 107）にも存在する。また、itar- の形式と T 接辞との間に（8）に示した形態音韻規則が適用された場合、予想される形式は itatte である。柳川方言においては、itatte の形式だけでなく、itate の形式も許容される。itate の語根についても、この形式を導く音韻規則を個別に立てるのではなく、ita- という語根形式を設定する。ita- は、柳川方言だけでなく、おおよそ「行く」に相当する意味で itar- 系列形式が用いられる方言において広く見られる（表 2）。

<sup>10</sup> 補充法が生じる語にはすでに活用上の不規則性がある場合が多いことが知られる。例えば、ゲルマン諸語のコピュラには音変化の結果として弱補充法が生じ、その後一部の言語で強補充形も生じた（Rudes 1980: 662–663）。ロマンス諸語の「行く」を表す動詞についても、形態音韻論的な不規則性がある動詞に強補充法が成立した（Rudes 1980: 667）。柳川方言の「行く」を表す動詞についても、弱補充形があるという点で不規則である動詞に、強補充法が生じるという変化が生じている。

-tara, -tai が後続する場合に出現可能である。itar- 系列形式について、三名の話者ともに -te, -tor, -tok が後続する場合に出現を許容する。-ta, -tara, -tai が直接後続する場合には、itar- の出現を許容する話者（表 10）と許容しない話者（表 11）があり、itar- の出現を許容する話者においても内省に揺れが見られる。

次に、自然談話におけるそれぞれの語根の出現頻度を見る。表 12 は、約 10 時間の自然談話（筆者収集，エリシテーション調査の協力者と同じ話者による）において出現した「行く」を表す語（全 347 例）とその語根（ik-, it-, i-, itar-）の出現環境を示すものである<sup>11</sup>。

表 12 自然談話における ik-, it-, i-, itar- の出現

		ik- 系列形式			itar- 系列形式	
		ik-	it-	i-	itar-	
T 接辞	-te	-te 「～して」	0	7	2	40
	-te or-, -te ok- に由来する接辞	-tor 「～している」	0	1	0	31
		-tok 「～しておく」	0	0	0	2
		-ta 「～した」	0	10	29	0
	-te ar- と屈折接辞に由来する接辞	-tara 「～したら」	0	0	8	0
		-tai 「～したり」	0	1	2	0
-ru 「～する」		61	0	0	0	
T 接辞以外	-yan 「～しなければならない」	39	0	0	0	
	-n 「～しない」	39	0	0	0	
	-u 「～しよう、～するだろう」	14	0	0	0	
	-c 「～しろ」	6	0	0	0	
	-rass 「～なさっている」	8	0	0	0	
	-yor 「～している」	47	0	0	0	

<sup>11</sup> 鹿児島諸方言の談話資料を用いた木部（2014）は、方言の語りの中でも「標準語的な口調が混じる」（木部 2014: 84）場合があり、「行って」という語形についても、標準語的なスタイル中で出現していることから標準語としての「行って」の例とみなせるものがある（木部 2014: 81）と指摘する。この点を踏まえ、査読者より①柳川方言の自然談話で見られる itte に標準語にスイッチしたために出現した「行って」はないか、ある場合、②標準語としての「行って」をどのように扱ったか、という質問を受けた。標準語的な「行って」か、柳川方言の itte かの判断は難しいものの、本稿では木部（2014）の判断方法にならい、当該形式が標準語的なスタイル中に出現していれば標準語の「行って」であり、そうでなければ柳川方言の itte とみなす。①について、自然談話に現れた 7 例のうち 6 例は標準語的ではないスタイル中に出現しており、1 例は標準語的なスタイルか否かの判断がつかない環境に出現している。6 例について、標準語的ではない要素、例えばいわゆる動詞ウ音便形（sugioota (sugiw-ta)「すれ違った」）、形容詞ウ音便形（otonasyuu (otonasi-u)「おとなしく」）、存在動詞の or-「いる」とともに出現しているため、柳川方言における itte とみなす。残る 1 例（koo itte ano amamioosima「こう、行って、あの、奄美大島」）については、出現した要素の標準語形と柳川方言形の間に大きな違いがないため、標準語的なスタイルか否かの判断ができない。②について、本稿では上記の 7 例をすべて考察対象とし、データから除外していない。

前節で示したエリシテーション調査の結果と合致し、ik- は T 接辞以外が後続する場合にのみ出現し、it-, i-, そして itar- は T 接辞が後続する場合にのみ出現する。継起接辞 -te が後続するときは、it-, i-, itar- が確認できるものの、itar- の頻度が最も高い。継起接辞 -te と ar- に由来する -ta, -tara, -tai が後続するときは i- の頻度が高く、エリシテーション調査で一部の話者が容認する itar- は出現していない。継起接辞 -te と or- 「いる」に由来する -tor, 継起接辞 -te と ok- 「置く」に由来する -tok が後続するときは itar- の頻度が高く、エリシテーション調査（表 10, 11）で容認されない i- の形態は出現していない。

ここまで見てきたように、柳川方言における「行く」を表す動詞は、ik- 系列形式と itar- 系列形式という二つの形式をもつ。前者は全ての接辞が後続する際に出現しうののに対し、後者は一部の接辞が後続するときのみ出現可能である「不完全」な補充法である。

#### 4.5. 補充法研究への知見

本節では、相補分布しない補充法を認定する立場 (Meščuk 1994, 田川 2019) において従来指摘されてきた「不完全」な補充法と本稿が見た「不完全」な補充法を比較し、柳川方言の「行く」を表す動詞が補充法研究に与える知見を二点示す。

一点目に、柳川方言における「行く」を表す動詞に見られる各形式の分布は、これまで相補分布を必要条件としなかった研究で扱われてきたものと異なる。これまでの研究で扱われてきた相補分布しない補充法の例 (Meščuk 1994: 353, 田川 2019) では、形式 A と形式 B は相補分布しないものの、いずれの形式も、その形式しか出現できない環境をもつ。すなわち、形式 A と形式 B の出現環境は一部で重なり合うものの、重なり合わない部分もある。一方、柳川方言における「行く」を表す動詞においては、ik- 系列形式は全ての環境で出現できるのに対し、itar- 系列形式は一部の環境でのみ出現する。すなわち、itar- 系列形式が出現可能な環境は、ik- 系列形式が出現可能な環境に内包される。田川 (2019: 36) は、一方の形式が出現可能な環境がもう一方が出現可能な環境に内包されるという補充法が想定できることを指摘し、これを「随意的補充」(optional suppletion) と呼ぶ。柳川方言における「行く」を表す動詞は、随意的補充の実例である。

二点目に、柳川方言の「行く」を表す動詞は、「随意的補充」であっても、いずれの形式が出現するかには偏りがあるという状況が見られることを示す。表 12 に示したように、ik- 系列形式と itar- 系列形式の両方が出現可能な環境であっても、実際の出現は itar- 系列形式に偏る。2 節で見たように、完全な補充法が生じる過程では、侵入される語が対応する語形をもつものあまり出現せず、一方で侵入する語の対応する語形が頻出するという状況が生じるとされる (Rudes 1980: 666, Bybee 1985: 91-92)。柳川方言における「行く」を表す動詞は、完全な補充法が生じる過程と類似したふるまいを示す。「随意的補充」であっても自然談話における形式の出現状況に偏りが見られる柳川方言における「行く」を表す動詞は、補充法が形成

される通時的プロセスを捉える上で重要な例である<sup>12</sup>。

## 5. まとめと今後の課題

九州方言のうち、肥筑方言および薩隅方言においては、「行く」を表す動詞に ik- 系列形式と itar- 系列形式がある。本稿は、少なくとも柳川方言においては両者が「行く」という意味を表す語根の異形態の関係にあり、通時的には ik- という動詞のパラダイムに標準語の itar- 「至る」に対応する動詞語根が侵入した結果として補充法が生じたものと分析した。ただし、ik- 系列形式と itar- 系列形式は完全には相補分布しておらず、この点で「不完全」な補充法である。

今後の課題は、ik- 系列形式と itar- 系列形式の両方をもつ他の九州方言を対象に、記述と比較をおこなっていくことである。本稿が明らかにしたように、少なくとも柳川方言においては、両形式は補充法の関係にあると分析できる。福岡県大牟田方言（筆者フィールドデータ）、鹿児島県内之浦方言（高城隆一氏 2023 年 p.c.）においても、エリシテーション調査の結果、両者が補充法の関係にあることを確認している。大牟田方言では、柳川方言と同様に継起接辞（-te）、完了接辞（-tor）、予期完了接辞（-tok）が後続する場合には ik- 系列形式と itar- 系列形式の両方が、その他の接辞が後続する場合には ik- 系列形式のみが出現するという不完全な補充法が見られる。内之浦方言でも、継起接辞が後続する場合には ik- 系列形式と itar- 系列形式が、その他の接辞が後続する場合には ik- 系列形式のみが出現するという不完全な補充法が見られる。一方で、3 節で見た鹿児島諸方言（木部 2014）のように、両形式が類義語の関係にあると主張されている方言もある。強補充法は、類義語の関係にあった異なる語根が、同じ語根の異形態としてふるまうようになるという通時的変化の結果として生じる。木部（2014）による鹿児島諸方言の記述は、ik- 系列形式と itar- 系列形式は、意味の違いをもつ類義語の関係から補充法の関係へと変化するはざまにあり、方言によってその進行度に差がある可能性があることを示唆する。この可能性を検証するためには、他の九州方言における ik- 系列形式と itar- 系列形式の出現環境、意味的特徴を詳細に記述し、方言ごとの類義語関係から補充法への変化の進行度を比較・分析する必要がある。

<sup>12</sup> もう一つの可能性として、「完全」な補充法が生じたあとに、日本語標準語の影響でそれが見られなくなった可能性もある。二つの可能性のうちいずれが正しいかを判断するには、標準語による強い影響を被る前の柳川方言のデータが不可欠である。このような資料には江戸時代中期以後に成立したとされる当時の柳川方言で書かれた俳諧『柳川方言涸河沙一撮』（岩淵 1933 にて翻刻）があるものの、この中には「行く」を表す動詞に継起接辞が後続する例がないため、検証することはできない。2 節で概観したように、「行く」を表す動詞に itar- 系列形式が出現するという現象は広く九州方言に見られる。九州方言全体の「行く」を表す動詞に見られる補充法の通時的な発達過程は、本稿の射程を大きく超えるものの、重要な研究課題である。なお、完全な補充法が生じたあとに標準語の影響によって不完全な補充法が生じた、という可能性は、査読者にご指摘いただいた。

## 参考文献

- 有元光彦 (2001) 「九州方言における動詞テ形の音韻規則」『音声研究』5(3): 19-26.
- 有元光彦 (2005) 「熊本県天草方言の動詞テ形における形態音韻現象」『山口大学教育学部研究論叢 人文科学・社会科学』55(1): 1-14.
- 有元光彦 (2008) 「長崎県中北部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『山口大学教育学部研究論叢 人文科学・社会科学』57(1): 1-13.
- 有元光彦 (2011) 「熊本県本土南部・鹿児島県本土北西部方言の動詞テ形における形態音韻現象」『山口大学教育学部研究論叢 人文科学・社会科学』60(1): 25-38.
- 有元光彦 (2017) 「鹿児島県本土西部・南部方言におけるテ形音韻現象の記述」『山口大学教育学部研究論叢 人文科学・社会科学』66(1): 15-29.
- 愛宕八郎康隆 (1983) 「長崎方言の「イタチ コイ。」などの表現」『国語と教育』8: 33-36.
- Börjars, Kersti and Vincent, Nigel (2011) The pre-conditions for suppletion. In: George Tsoulas, Alexandra Galani and Glyn Hicks (eds.), *Morphology and its interfaces*. 239-267. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Bybee, Joan (1985) *Morphology: A study of the relation between meaning and form*. Amsterdam: John Benjamins.
- Corbett, Greville (2007) Canonical typology, suppletion, and possible words. *Language* 83(1): 8-42.
- Cruse, David (1986) *Lexical semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dressler, Wolfgang (1985) On the predictiveness of natural morphology. *Journal of Linguistics* 21(2): 321-337.
- Fisiak, Jacek (1968) *A short grammar of Middle English*. Warszawa: Polish Scientific Publishers.
- 藤本憲信 (2002) 『熊本県菊池方言の文法』熊本: 熊本日日新聞社.
- 藤本憲信 (2011) 『熊本県方言辞典』熊本: 創想舎.
- 原田章之進 (1993) 『長崎県方言辞典』東京: 風間書房.
- 原田走一郎 (2019) 「佐賀県武雄市北方方言」方言文法研究会 (編) 『全国方言文法辞典資料集 (5) 活用体系 (4)』89-96. 大阪: 方言文法研究会.
- Haspelmath, Martin and Andrea Sims (2010) *Understanding morphology*. Abingdon: Routledge.
- 逸民誠 (2022) 「滋賀県湖東方言」方言文法研究会 (編) (2022), 15-30.
- 平塚雄亮 (2014) 「福岡県福岡市方言」方言文法研究会 (編) (2014), 125-134.
- 方言文法研究会 (編) (2014) 『全国方言文法辞典資料集 (2) 活用体系』大阪: 方言文法研究会.
- 方言文法研究会 (編) (2017) 『全国方言文法辞典資料集 (3) 活用体系 (2)』大阪: 方言文法研究会.
- 方言文法研究会 (編) (2022) 『全国方言文法辞典資料集 (7) 活用体系 (5)』大阪: 方言文法研究会.
- 井島六助 (1984) 『出水語概説』鹿児島: 黙遥社.
- 糸井寛一 (1960) 「南豊後山村方言における動詞の活用体系」『大分大学学芸学部研究紀要. 人文・社会科学. B集』1(9): 67-94.
- 糸井寛一 (1964) 「九重町方言の動詞の語形表」『大分大学学芸学部研究紀要. 人文・社会科学. A集』2(4): 28-54.
- 糸井寛一 (1983) 「大分県の方言」飯豊・日野・佐藤 (1983), 237-266.
- 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編) (1983) 『九州地方の方言』東京: 国書刊行会.
- 岩淵悦太郎 (1933) 「柳川方言洹河沙一撮」『方言』3(1): 132-137.
- 木部暢子 (2014) 「鹿児島方言の「イッ」と「イタッ」—テキストを使った方言研究の実践—」『西日本国語国文学』1: 72-85.
- 木下文夫 (1996) 『九州語逆引き辞典 付文法』佐賀市: 九州方言研究所.
- 倉田一郎 (1973) 「米良の方言」西米良村史編さん委員会 (編) 『西米良村史』804-825. 西米良村: 西米良村.
- 黒木邦彦 (2024) 「CROJADS」<https://www.dropbox.com/sh/sv31ah3h8ufsgyp/AADMneRmYMwl-OC2K3fVODEia?e=1&cdl=0> [2024年11月アクセス].
- 黒木邦彦・野間純平 (2015) 「形態論」森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦 (編) 『甌島里方言記述文法書』61-90. 立川: 国立国語研究所.
- Lass, Roger (1992) Phonology and morphology. In: Norman Blake (ed.) *The Cambridge history of the*

- English language*. Vol. 2: 23–155. Cambridge: Cambridge University Press.
- 松田美香 (2017) 「大分県由布市庄内町方言」方言文法研究会 (編) (2017), 143–153.
- 松田康夫 (1991) 『筑後方言辞典』久留米: 久留米郷土研究会.
- 松丸真大 (2014) 「京都府京都市方言」方言文法研究会 (編) (2014), 90–101.
- 松丸真大 (2017) 「高知県宿毛市方言」方言文法研究会 (編) (2017), 127–142.
- 松岡葵 (2021) 「福岡県柳川市方言の文法概説」修士論文, 九州大学.
- 松岡葵 (2022) 「福岡県柳川市方言」方言文法研究会 (編) (2022), 43–55.
- Matsuoka, Aoi (2022) Yanagawa. In: Shimoji, Michinori (ed.) *An introduction to the Japonic languages: Grammatical sketches of Japanese dialects and Ryukyuan languages*. 261–292. Brill: Leiden.
- Matthews, Peter (2014) *The concise oxford dictionary of linguistics*. Third edition. Oxford: Oxford University Press.
- Mečić, Igor (1994) Suppletion: toward a logical analysis of the concept. *Studies in Language* 18(2): 339–410.
- 宮岡大 (2022) 「動詞形態論」椎葉村方言語彙集編集委員会 (編) 『椎葉村方言語彙集』699–712. 椎葉村: 宮崎県椎葉村.
- 中村京介 (2019) 「長崎県五島列島宇久島野方方言の文法概説」修士論文, 東京外国語大学.
- 野田智子・東出朋 (2024) 「長崎県雲仙市南串山町鬼池方言」方言文法研究会 (編) 『全国方言文法辞典資料集 (8) 活用体系 (6)』15–24. 大阪: 方言文法研究会.
- 岡野信子 (1982) 「福岡県の方言」飯豊・日野・佐藤 (1983), 57–86.
- 大久保寛 (2002) 『さつま語辞典』鹿児島: 高城書房.
- 小野志真男 (1969) 「佐賀県北山方言」九州方言学会 (編) 『九州方言の基礎的研究』351–414. 東京: 風間書房.
- バルデン・ブラシャント (編) (2023) 「基本動詞ハンドブック」<https://www2.ninjal.ac.jp/verbhandbook/> [2025年2月アクセス].
- Rudes, Blair (1980) On the nature of verbal suppletion. *Linguistics* 18: 655–676.
- 佐々木冠 (2021) 「不規則性の衰退: 日本語方言の動詞形態法で起きていること」林由華・衣畑智秀・木部暢子 (編) 『フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史』229–258. 東京: 開拓社.
- 佐藤亮一 (編) (1989) 『日本方言大辞典 上巻』東京: 小学館.
- 下地理則 (2020) 「方言研究における例文提示法について」『方言の研究』6: 119–141.
- 下野敏見 (2006) 『鹿児島ふるさとの昔話』鹿児島: 南方新社.
- 志津田藤四郎 (1999) 『佐賀の方言』中巻述語編, 佐賀: 佐賀新聞社.
- 立花千夏 (2022) 「熊本県山鹿市菊鹿町方言の動詞屈折形態論」卒業論文, 九州大学.
- 立山芽衣 (2020) 「長崎県五島列島福江島崎山方言における動詞屈折形態論の記述」卒業論文, 九州大学.
- 田川拓海 (2019) 「分散形態論と日本語の補充: 存在動詞「いる」と「おる」の交替」岸本秀樹 (編) 『レキシコンの現代理論とその応用』27–48. 東京: くろしお出版.
- 高城隆一 (2022) 「鹿児島県肝付町(内之浦)」セリックケナン・木部暢子・五十嵐陽介・青井隼人・大島一 (編) 『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』267–314. 立川: 国立国語研究所.
- 東条操 (1953) 『日本方言学』東京: 吉川弘文館.
- 内山一兄 (1973) 「八女方言の語法」内山一兄・郷田敏男 (編) 『八女の方言』34–177. 八女: 八女の方言研究会.
- 占部美代子 (1966) 「福岡県嘉穂郡穂波町太郎丸方言の程度副詞」『方言研究年報』9: 65–70.
- Veselinova, Ljuba (2006) *Suppletion in verb paradigms: bits and pieces of the puzzle*. Amsterdam: John Benjamins.
- Wejna, Jerzy (2001) Suppletion for suppletion, or the replacement of eode by went in English. *Studia Anglica Posnaniensia* 36: 95–110.
- 湯澤幸吉郎 (1955) 『室町時代言語の研究』東京: 風間書房.

執筆者連絡先：  
東京外国語大学  
日本学術振興会特別研究員 PD  
e-mail: oash7499@gmail.com

[受領日 2024年11月20日  
最終原稿受理日 2025年5月16日]

## Abstract

### Incomplete Suppletion in the Verb Expressing “to go” in the Yanagawa Dialect of Fukuoka Japanese

AOI MATSUOKA

TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES JSPS RESEARCH FELLOWSHIP FOR YOUNG SCIENTISTS PD

This study argues that the verb expressing “to go” in the Yanagawa dialect of Fukuoka Japanese shows suppletion and clarifies the distributional environments of each root. In many Kyushu dialects, two forms of the root expressing “to go” have been reported: one containing *ik* and another containing *itar* (Yanagawa dialect: *ikan*/\**itaran* “not go”; *itte*/*ita(t)te* “go and”). Studies focusing on these forms are generally divided into those analyzing the two as synonyms and those suggesting a suppletive relationship between them. Based on descriptive data, this paper argues that these are not synonyms but are in a suppletive relationship in the Yanagawa dialect. The form containing *itar* appears when it is followed by suffixes historically containing *-te* (hereafter referred to as T-suffixes), specifically either the *-te* suffix or the perfective suffix *-tor*, or the anticipatory perfect suffix *-tok*. It does not appear when followed by other T-suffixes or non-T-suffixes. The forms containing *ik* and *itar* are not in a fully complementary distribution, making this an instance of “incomplete” suppletion.